

No. 71 2013 年



日彫会報

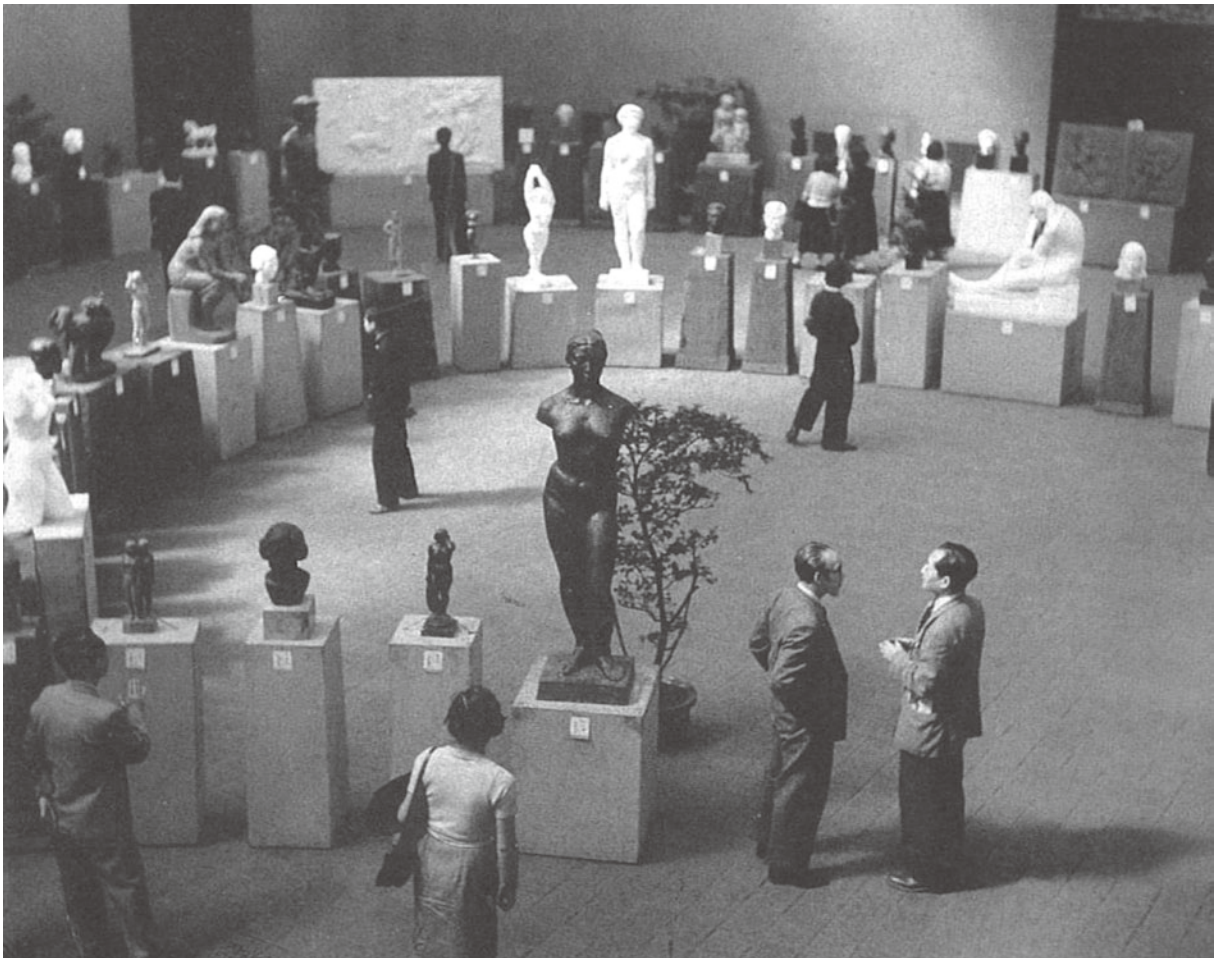
公益社団法人
日本彫刻会

事務所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-29-18 レジョン・ド・諏訪202号室

TEL 03(3209)1861 FAX 03(3232)0557

<http://www.niccho.com/> email: webmaster@niccho.com

— 日本彫塑家倶楽部結成から60年 —



結成当時の展覧会会場風景（第3回日本彫塑展覧会 昭和30年）

第四十三回日彫展を終えて

公益社団法人 日本彫刻会理事長 市村 緑 郎

今年の桜は例年よりも早く咲き、日彫展の開会を迎える頃には、上野の杜はすでに平素の様子を取り戻しつつあるように見えました。しかしながら、数多くの人、特に若い人が美術館や動物園を目指して東京文化会館前に集う光景は、上野恩賜公園ならではの格別な高揚感を感じさせます。

第四十三回日彫展は、新装になりました東京都美術館での二回目の開催となりました。会員の皆様のご尽力で、落ち着きのある充実した雰囲気の出展会となりましたこと、心より御礼申し上げます。本会の特徴である人体の具象的表現は、益々深度を見せ、鑑賞者の皆様にも彫刻芸術の魅力をご理解頂けたものと考えております。

また、本会の主要な取り組みである視覚に障がいのある方の彫刻鑑賞も好評でした。

例年同様、今回も彫刻鑑賞教室にご参加頂いた筑波大学附属視覚特別支援学校、都立久我山青光学園、都立葛飾盲学校の児童、生徒の皆さんは、彫刻作品に触れる喜びを心の底から伝えてくれました。こうした喜びに私たち作家もさらに応えるため、次の段階に歩みを進めていきたいと考えております。自分自身も視覚障がいでありながら彫刻鑑賞の研究に取り組み、強い関心を持つてご協力頂ける方と共に、本会では、より充実した活動へと飛躍させようとしていきます。会員の皆様にもさらなるご理解と、ご協力をお願い致します。

さて、冒頭にも述べましたように美術、音楽、学術の複合施設とも言える上野の杜の力を感じたわけですが、日彫展の東京都美術館開催のポイントは「人」にあるといえ

ましょう。本会のみならず多くの公募展が、鑑賞者の減少に頭を悩ませている状況は周知のことと思います。そのような中で、東京都美術館は、様々な人と出会う大きな可能性を秘めた場所なのです。

「新しい酒は、新しい革袋に」という言葉がありますが、新しい革袋（都美術館）は整いました。次は、新しい酒です。それは、新しい鑑賞者であり、新しい出品者なのです。私たち会員が、清新で活力に満ちた、魅力ある作品の制作に取り組むこと、そして、本会の活動に希望を持って関わっていくことこそ、この新しい酒を手に入れることになるのではないのでしょうか。

会員の皆様と共に未来への一歩を力強く踏み出したい、第四十三回日彫展を終えてその意を益々強く致しました。

第43回日彫展報告

公益社団法人日本彫刻会は、昭和22年「日本彫刻家連盟」としての発足以来、60年以上の歴史を持つ国内最大の彫刻研究団体です。本会は活動の中心事業として、日彫展を開催しております。

本年も、リニューアルオープンした上野の東京都美術館にて2度目の開催となる、第43回日彫展を開催いたしました。日彫展では彫刻作品の展示のほかに、彫刻研究会、ギャラリートーク、触れる彫刻鑑賞プロジェクトなどの活動を通して、作家の彫刻芸術の研鑽と、芸術文化の振興と社会への貢献に努めています。

そのほか、本会は地方日彫展・各種選抜展などを開催しております。（地方日彫展・選抜展については8〜10ページに掲載）
第43回日彫展の詳細は以下の通りです。

①会期 平成25年4月19日（金）

〜4月30日（火）

②会場 東京都美術館

ギャラリーA・B・C

③陳列点数

329点

（東京都台東区上野公園8-36）

〈内訳〉

正会員

246点

会友

45点

遺作

3点

無鑑査（一般応募）

3点

鑑査

（一般応募）32点

うち初入選12点

④審査員

審査員長

市村緑郎

神戸峰男

石原昌一

上田久利

小比賀強

神野忠和

工藤潔

熊谷喜美子

嶋畑貢

岡本昭

川畑祐徳

河村佳則

堀内有子

間島博徳

山田進

（以上15名）

西望賞審査員

加藤貞雄先生（美術評論家）

⑤会友推挙選考委員

石原昌一 上田久利

小比賀強

（以上3名）

⑥受賞者

西望賞

中村優子

日彫賞

遠藤徳

横山丈樹

森田一成

優秀賞

元田木山

小宮山美貴

丹羽俊揮

新人賞

松井みどり

坂本健

太田望

加藤真浩

重松涛

竹田篤生

宮本温子

⑦正会員推挙・会友推挙

正会員推挙

上原正廣

川勝徹

坂本健

佐藤智子

島田國益

鈴木紹陶武

關ゆかり

高砂晴光

道正勝重

村栢愛美

森田一成

（以上11名）



会場風景 ギャラリーA



会場風景 ギャラリーA

会友推挙

芦田風馬 太田望 岡俊三

木村純一 小山信一 志満津華子

チヨウスジン 辻村昌久 中野節男

西川好枝 山田雅英

(以上11名)

⑧入場者数

8,112名

(内訳)

一般 171名

学生 17名(小学生含む)

企画展協賛 169名

招待状 4,202名

招待券 2,118名

出品者 1,005名

身体障がい者手帳をお持ちの方 132名

付添者 54名

70歳以上、子供 207名

⑨彫刻研究会

4月20日(土)

受賞作品を中心とした作品批評、研究会を実施しました。

参加者 約150名

(詳細は7ページに掲載)

⑩作家が語る鑑賞会(ギャラリートーク)

期間中毎日(4月20日、30日を除く)

通算参加者 約210名

(詳細は6ページに掲載)

⑪触れる彫刻鑑賞プロジェクト

a、タッチツアー

希望者の申し込みにより実施しました
通算参加者 約13名



会場風景 ギャラリー B

b、盲学校鑑賞教室

4月25日(木)

東京都立久我山青光学園

小学生16名 引率者15名

4月26日(金)

東京都立葛飾盲学校

中学生1名 引率者1名

筑波大学附属視覚特別支援学校

高校生17名 引率者14名

(詳細は7ページに掲載)

⑫表彰式及びオープニングパーティー

4月20日(土)

会場 東天紅上野本店別館 平成ホール
(東京都台東区上野池之端1-4-33)



会場風景 ギャラリー C



会場風景 ギャラリー C

受賞作品

□西望賞

「風の門」

中村優子



西望賞審査員 加藤貞雄 先生

(美術評論家)

(審査講評)

西望賞の中村優子さん「風の門」は、身にピッタリのスラックスの若い女性の、着衣の像です。銀箔で着色されたシャツ姿で腕組みし、首をややかしげて立っているその立ち姿がいい。気負いも誇張も何らなく、さわめて自然に、すっと立っている。そのいや味のなさがこの作品の魅力です。

ほかに3点選んだ候補についてふれます。まず、辻畑隆子さんの「少年・神無しの朝」には乾漆を思わせる仕上げのひ弱そうな少年の裸の立像。目がうつろで首がやや前かがみになって、いかにも不安な気配です。儂さ、頼りなさが伝わります。

田村晴江さんの「ショパンを聴きながらChair」はイスに腰かけてうつとりとしている裸婦の自然な表現の技はなかなかのもの。伸ばした右手の指先にリアリティがあります。齋藤尤鶴さんの「風の記憶」は、無理のないポーズで、リズムカルなノミ痕が木彫ならではの味を感じさせます。帽子の下から出た編んだ髪が肩にかかって丸い空間を作った工夫が生きてます。

審査の前に市村緑郎さん、神戸峰男さんといわゆる「日展アカデミズム」に話が及び、アカデミズムがカチツと守られていることがアンチ・アカデミズムをも強くして彫刻芸術を元気にするという意見を申しましたらおふたりの共感を得ました。それで、日展でも、日彫会でも東京芸大でも、ベーシックな勉強が大事だということとを、ここでいおうと思います。いっそ、開き直って、アカデミズムに徹してみたらいかがですか。例えばデスピオの人体との格闘を追体験してみるとか。そこから新鮮な発見があるかもしれません。その先に抽象でも何でも広がるでしょう。

(加藤貞雄)

□日彫賞



遠藤徳
「故郷の記憶」



横山丈樹
「Dahlia」



森田一成
「蓮」

□ 優秀賞



坂本健
「露わにされぬ言葉」



松井みどり
「時の流れ」



丹羽俊揮
「Je crois」

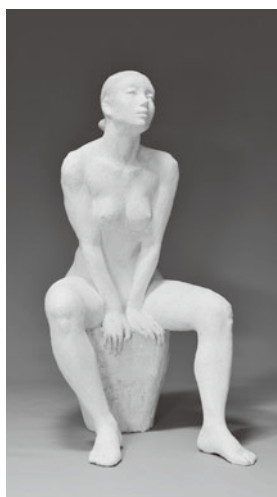


小宮山美貴
「あさって」

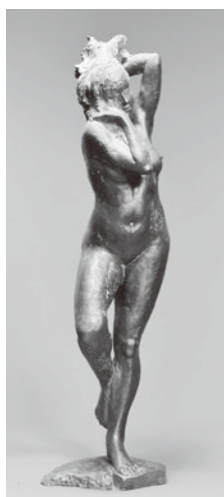


元田木山
「春を待つ」

□ 新人賞



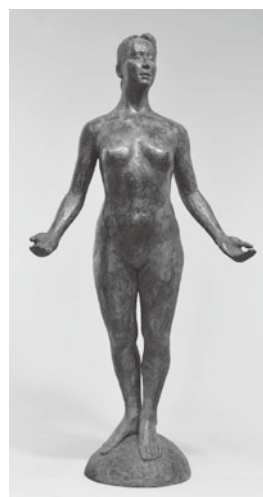
宮本温子
「空とお夢をみる」



竹田篤生
「Hydrangea」



重松涛
「パニック」



加藤真浩
「懐」



太田望
「東風」

◇ ギャラリートーク

第43回展でも毎日の企画として「ギャラリートーク」が開催され、彫刻の見方や制作過程の苦心などを話題に、多くの方々と語らう機会となりました。

今回も様々な質問が寄せられ、石膏型取りから、樹脂や乾漆へ素材転換する方法など、作家自身による丁寧な解説によって、彫刻制作について詳しく知っていただけたと思われます。このように会場で一般の方々から率直な質問を受けることは、作家にとっても改めて表現とは何か考える機会にもなりますし、もっと彫刻について知ってもらいたいと意欲が沸くものです。

また、「彫刻は粘土で作るだけではなく色々な工程があることを知ったが、彫刻家は大変ですね。」といった感想が寄せられ、作家が語る制作過程を通し、日頃の彫刻家の姿が垣間見えることも、会場で作家と直に語り合うギャラリートークならではの魅力といえるかもしれません。

今回も、毎日、違う当番の先生方が担当されたためバラエティに富む内容をお伝えでき、とても幅のあるギャラリートークを行うことができました。



◆彫刻研究会

本会は、受賞作品を中心に、受賞者、審査員、及び若手作家による彫刻研究会を開催しています。この企画は、受賞者の作品に対する思いや制作の過程を聞くことができ、鑑審査を行われた先生方による批評と若手作家の意見を交えることで、彫刻芸術に対する学びを深めていく研究会です。今回で4回目となる今年の研究会は、4月20日(土)午後1時から、展覧会会場である東京都美術館ギャラリーA・B・Cにて行われました。

会場には西望賞・日彫賞・優秀賞・新人賞のそれぞれの受賞者と、審査員の先生方、本会の正会員・会友、入選者の方々、また一般鑑賞者の方々が集い、総勢150名余の参加がありました。

この研究会の特色は、ギャラリートーク同様に、鑑賞者の方々と作家が直接交流できる機会となっていることです。通常、作品は展示された時点で、作家のもとを離れ、作品を造った作家の思いや考えを汲み取ることは鑑賞者に委ねられます。しかしながら、展覧会場には、彫刻の展覧会に来たのは初めてという方もいらっしゃると思いますので、日彫会ではそうした彫刻に馴染みの薄い方々との交流も視野に入れ、この機会をととても大切にしています。

研究会で受賞者が語る作品の制作過程からは、彫刻制作における素材や技法のみならず、受賞者の思いや考えを聞く事ができます。また豊富

な経験に基づく審査員の先生方による批評は、作家と鑑賞者双方の彫刻芸術に対する造詣に広がりを与えるとともに、若手の作家にとって次作に対する表現意欲を高める機会でもあります。

会場に展示された新人賞から西望賞までの作品を一般の方々と巡りながら、審査員の先生方と受賞者の掛け合いによる親しみやすい作品解説を聞くことは、とても楽しいひとときです。研究会で受賞者が語る彫刻制作への思いや、制作の技法を知ることが出来ます。また、豊富な経験に基づく審査員からの作品批評は、作家と鑑賞者双方の彫刻芸術への理解・造詣を、より深いものとするでしょう。

本年も非常に充実した彫刻研究の場となりました。



審査員長による作品解説

◆触れる彫刻鑑賞プロジェクト

・タッチツアー
・盲学校鑑賞教室

本会展覧会企画の中で最も歴史ある、「触れる彫刻鑑賞プロジェクト」は、第43回展においても好評を博しました。盲学校鑑賞教室では、久我山青光学園、葛飾盲学校、筑波大学附属視覚特別支援学校の方々に参加して頂きました。



鑑賞教室・タッチツアーの様子

参加された児童・生徒の方々は、手で作品に触れることで形や質感を味わい、とても楽しまれていたようです。学校によって参加された子供の学年が異なっていたため、それぞれの感性に基づく、心豊かな発言が会場に溢れました。また中には、継続して参加されているお子さんもうらっしゃり、作品の素材や技法など、とても熱心に尋ねられ、その鑑賞力の高さに驚かされたことが印象的でした。

第43回日彫東海展

会期 平成25年5月8日(水)

5月12日(日)

陳列点数 103点(内巡回作品63点)

入場者数 1,924名

中日賞

「U・89」 原直矢

東海テレビ賞 「そびえたつ」 木藤淳成

愛知県知事賞 「時」 堀江宣勝

日彫東海展の「触れてみる彫刻展」が展示作品に触れられる彫刻展として、共催の中日新聞、東海テレビ放送により、地元の新聞・テレビニュースで紹介されました。またNHKラジオからの取材もあり、視覚障がい者の芸術鑑賞を行う試みとして、日彫展の情報が地域に発信されました。



日彫東海展 勉強会の様子

5月11日(土) 午後2時から午後3時
市民ボランティア団体「ビジョン共有クラブ」から昨年と同じく9名の参加者とボランティア13名、個人で参加された1名、ボランティア1名、そこにそれぞれ作家が加わり「触れてみる彫刻鑑賞教室」が開催されました。

参加者からは、「日彫東海展を本当に楽しみにしていました。」と、本会展覧会への期待の言葉を頂き「今年の動物はなんでしょうかね。」「今回の作品は、鳥ですか、口ばしを触った感じからフラミングではないでしょうか。」「ズボン履いていますね。しわの感じが良く出てますね。」など感想が語られ、作家・鑑賞者共に楽しい時間を過ごすことが出来ました。



日彫東海展 鑑賞教室の様子

ビジョン共有クラブ代表の方は「私達市民団体は、見える人も見えない人もお互いに共有してアートを楽しくと活動しています。良い時間を過ごすことが出来ました。これからも感動をさせて下さい。」と述べられ、彫刻展鑑賞としてのひとつの方向性を示してくださいました。

昨年度よりの試みとして、学生に彫刻をより有意義に鑑賞してもらいたいと思い「一番印象深く感じた作品、興味を抱いた作品」などの感想レポートを、作品の前で、感じたその場で記述してもらう企画を行っています。感想を書き記すことで、一層思いを込めた彫刻との対話体験が出来たようで、学生たちは作品を一点一点真剣な眼差しで鑑賞し、大変貴重な感想レポートを寄せてくれました。

これからも、「触れてみる彫刻展」や新たな企画を、県民・教育期間に広く呼び掛け、鑑賞者と作者の交流を計り、楽しく芸術への発見がなされる展覧会となつて、来場者増加にもつながるよう努めてまいりたいと考えております。

(東海日彫会事務局)



日彫東海展 レポート記述の様子

第43回日彫北陸展

会期 平成25年6月30日(日)

7月4日(木)

陳列点数 87点(内巡回作品63点)

入場者数 1,612名

北陸日彫会賞

「ママのサンダル」 村井良樹

北國新聞社長賞

「にらめっこ」 川田良樹

日彫北陸展は石川と富山で会場を交互に変えて開催しています。本年は石川県立美術館において開催致しました。一昨年から石川会場では特別企画として親子彫刻ワークショップを開いています。



日彫北陸展 開場式の様子

「家族で作ろう。みんなの笑顔」をテーマにテラコッタ粘土で20cm立方程度の頭像制作を行いました。前回に引き続き参加された方もおられました。ほとんどの方が初めての経験でした。

石川会員は学校の教員や造形教室の先生など、教えるプロが多いので、初心者の方でもツボを押さえた指導が行われていました。参加された方々も「美術館で制作ができる」ということが魅力のようで予定参加者をはるかに上回る49名の参加を得ることができました。



日彫北陸展 ワークショップ
「家族で作ろう。みんなの笑顔」

参加者は幼児や小学校低学年の児童も多く、自由に楽しく制作してもらうことに主眼をおきました。大人の方々には要望に応じて、石川会員が専門家としてのコツを指導しました。焼き上げるためには内部の粘土のくり抜きが必要ですが、これも参加者にそれぞれ行ってもらいました。普段ふれることない彫刻制作の一

端をかいま見ることによって、制作に対する関心を一層高めて頂くことができたのではないのでしょうか。

参加者からは口々に「粘土にふれることができて楽しかった」「知らないことを実際に体験でき、面白かった」等の感想を頂きました。焼き上がった作品がこの夏のよい思い出になることを願っています。

7月4日 石川県立盲学校の児童を迎え、「ふれてみる鑑賞会」を開催しました。約1時間の会でしたが、様々な形態や素材の作品に直にふれ、それぞれのよさを味わってもらえたようです。少女の像と背比べをしてみたり、大きな作品にぶら下がってみたりと、こんな鑑賞の仕方があるのだなあと感心させられました。

鑑賞会に参加した作者も、作った時の気持ちや、伝えたかった思いなどを述べることで、それらに対する素直な感想が聞け、次の作品へと活かすいい機会を得ることができたと思います。なにより子どもたちの笑顔が大きなきもととなりました。



日彫北陸展
「ふれてみる鑑賞会」



(北陸日彫会石川事務局)

■ 日彫会選抜展（三越展）

平成25年6月19日（水）から25日（火）まで、日本橋三越本店6階美術特選画廊にて日彫会選抜展が行なわれました。

「三越展」の愛称で親しまれているこの企画は、平成2年、日彫展の第20回を記念して企画され、以降隔年で行なわれてきました。本年の、2013日彫会選抜展は、「形象へのいざない」を副題として、39名の作家がそれぞれの試みを発表する場となりました。

発表作品は実材を主としており、木彫・ブロンズ・乾漆・テラコッタといった素材への挑戦も展覧会の魅力の一つです。会場に並べられた作品は、小品ながら、卓越した技と表現への冒險的な試みも光っており、具象彫刻の在り方への問いかけを感じさせるものでした。

会場には作家が常時控えており、作品の作り方や制作意図などを聞くことができます。毎年楽しみに見に来てくださる方もおり、彫刻を愛する多くの方々とともに作品を味わう和やかな雰囲気の間展覧会となりました。



作品を前にしたギャラリートークの様子

初めて彫刻展をみる方へVI

ーテラコッタ制作技法ー



ここではテラコッタ制作での成型や焼成の専門的な技術や知識をページに限りがありますが、詳しくは述べられません。最近彫刻制作の素材として多く見られる、テラコッタ作品がどのような工程で作られているか大まかな流れを知っていただけたらと思います。

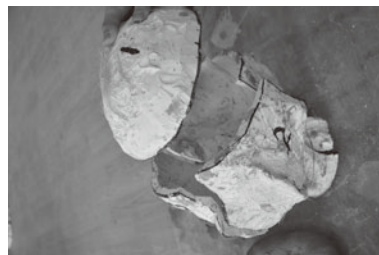
テラコッタ「Terra-Cotta」とは焼いた土というイタリ語で、私たちが素焼きと呼んでいるものです。一般的には土を800度程度で軽く焼き固める方法で焼成されたものをよく見ます。材料として扱う土は様々なものがありますが、不慣れな場合は市販されているテラコッタ粘土

が成形しやすく、焼成にも適しています。扱いに慣れてきましたら、市販の土をベースに他の土を混ぜて焼き色を工夫し、テラコッタ特有の性質を研究することも面白いです。焼成も電気窯、ガス窯、野焼きなど様々で焼成が変われば焼きあがりも変わってきます。

今回は塑像粘土で頭部（自刻像）を作り、石膏型込めという方法を紹介します。



②空気を押し出しながら土をこめる



①原型を5個に分割した石膏割型



④厚みを竹串で確認（今回は15mm）



③タンポで土シワを伸ばし空気を押し出す



(上右) ⑦型合わせ



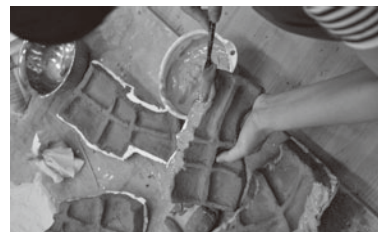
(上中央) ⑧合わせの完成 ゴムひもや針金などで圧力をかけてしっかり合わせる



(上左) ⑨型外し1日ほど待ち、粘土の水分を石膏型に吸わせ少し固くして外す。
テラコッタ粘土が湿っているうちは手を加えることが出来ます。
型の合わせ目や破損したところの修整ばかりでなく、この時点から新たな制作も
できます。今回は2点制作。



⑤歪みや割れを防ぐためにリブ
(補強の土手) 付け



⑥合わせ口に傷をつけドベ
(同質の土を水で溶いたもの) で接着

土と火そしてこれらを包み込む大気が生み出す創造とも言うべきテラコッタ。
600度から800度という熱で焼くテラコッタは大気との親和性が高くその影響を受けやすいことから柔らかな表情に仕上がります。さらにつくり手の土と火への働きかけによって様々なかたちを生み出すことが出来無限な可能性があるように思われます。(会員 勝野真言)



⑪完成
焼成後石膏を水で薄く溶いたものを掛け、ふき取った後、
ベンガラで赤みを少し付けてみました。



⑩電気窯入れ
作品の大きさ、厚みによって焼成時間はまちまちですが100から500度まで、
ゆっくりと温度を10時間かけて上げ、
800度までは3時間かけ焼成

日本彫刻会の源流にあたる日本彫塑家倶楽部が結成された昭和28年(1953)、今日から数えて60年前に、先達たちは彫塑芸術の研究に努め、その発展に寄与するために会員数320余名の会を立ち上げました。日彫展の最高賞である「西望賞」は、日本彫塑家倶楽部結成の中心人物の一人であった北村西望の名を冠してつけられた賞です。
北村西望作《平和祈念像》は、おそらく日本においてもっとも有名な野外彫刻の一つに数えられる作品でしょう。長崎市松山町平和公園の



原型制作の様子(昭和28年頃)

東京彫刻散歩VI

《平和祈念像》 ブロンズ

北村西望 (1884 ~ 1987)

設置場所 東京都北区王子1-11-1

北とびあ正面玄関前

北端にある《平和祈念像》、この彫刻を前にして、毎年8月9日に長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典は行なわれます。今回の東京彫刻散歩で紹介する北区北とぴあ前《平和祈念像》は長崎平和公園の作の小型原型として、4分の1の大きさでつくられた作品です。

北村は、明治17年、長崎県南高来郡南有馬村（現・南島原市）に生まれました。京都市立美術工芸学校を卒業の後、東京美術学校（現・東京芸術大学）に入学し、文展初期より朝倉文夫や建畠大夢らとともに研鑽を重ね、注目を集めます。

大正10年に東京美術学校塑造部教授に任命され、大正14年には帝国美術院会員となりました。そして、昭和33年にはその功績が讃えられて文化勲章を受賞します。昭和62年3月、享年104歳で逝去するまで、北村の制作意欲は衰えることなく、多くの後進の指針となり、日本近現代の彫刻史に多大な業績を残しました。

北村が《平和祈念像》の制作にあたっていた時期は、まさに日本彫塑家倶楽部結成の時期と重なります。昭和20年代後半、制作のみならず、彫刻文化の発展ために尽力していた一人の彫刻家の姿がそこにはありました。齢七十を迎える

北村ではありましたが、大作に向かうその姿勢はなお挑戦的であり、《平和祈念像》の制作において新技法「石膏直付け法」を確立しました。

北区北とぴあ前《平和祈念像》も「石膏近付け法」によって制作された原型から鑄造した作品です。荒々しく石膏を重ねてつくられたその形は、彫刻家の息づかいを伝えているようです。

北区北とぴあ前《平和祈念像》は、北区の『平和都市宣言』の象徴として、平和を願う北区民のシンボルとして、明日を見据えています。



北区北とぴあ正面玄関前《平和祈念像》
像高2・45m

〈散歩のご案内〉 ー 最寄駅 ー

・ JR 京浜東北線 王子駅北口より徒歩2分
・ 東京メトロ南北線王子駅5番出口より直結

編集後記

◆編集に際しましてご協力頂きました先生方、並びに北村路子様、公益財団法人・北区文化振興財団・岡田光悦様に心より御礼申し上げます。

◆今年は本会の源流である「日本彫塑家倶楽部」の発足から数えて60年の節目にあたります。今月号の表紙には、在りし日の展示風景を選択しました。当時は企画として、展示会場を被写体としたコンクールがあり、表紙写真はその入選作品です。草創期における先生方のご活躍、ご奮闘によって、本会が今に続いていることが偲ばれます。

◆今回の「東京彫刻散歩Ⅵ」では、初めて日本人作家を採り上げましたが、本会の名誉会長であった北村西望先生の作品を選出しました。その名前を冠する賞は、北村西望先生から寄贈された基金により創設されたものです。執筆にあたり北村西望先生の作品や経歴を再勉強し、改めてそのエネルギーを感じるばかりでした。

編集委員 堀内 秀雄 長谷川倫子 一鉄田 徹
前芝 武史 三政 洋一 宮坂 慎司

日彫会報 No.71 平成25年8月31日発行